

名残の榮：文苑

著者	蘭溪
雑誌名	龍南會雜誌
巻	108
ページ	44-46
発行年	1904-11-30
その他の言語のタイトル	名残の榮：文苑
URL	http://hdl.handle.net/2298/5764

誰かに聴けばさながらに

神と人との別れよす

この世に出でし悲哀を

訴ふ如き其調

さればこほろき汝が歌の

調べ低きを問ふなかれ

たゆまず流すさゝやぎに

永久の響も音に出でん

草に投げたる小さ矢の

かくれし土を貫がごと

心の宮の戸にふれて

とほに刻まん美しき歌

○蝶々あはれや

蝶々あはれやうらぶれ姿

疲たからだに伸びたひげ

風が破つた緑の袂

雨が洗つた襦袢の裳

今日も迷ふてゆらくと

花と實とない花園へ

名残の榮

(一)

雲心なく行く水に

紅絹の裳の影淡く

空も名残と消に行けば

有象の聲も野も山も

たゞ返照の榮々に酔ひ

西に流るゝ唐綾の

夕雲遠くうすれては

稚き女神が紅の

舞の趨をふまはわて

虞淵の園に入るがあと

崇高きおもひをのまきすや

(二)

御空には星地には闇

残して消わし暮の色

あまりに清き若人の

はかなき戀に似たるかな。

若き乙女の體かいくろよ

董こまはり咲くてふ道理を

しらでかひとりうつゝなの

名利の泡に浮き沈み

悶へ苦しむ人の子よ

汝が窓に降る搖落に

問へよ人とは噫何と。

緑も淺き青春の

希望の影を空に追ひ

やがてさびしき空城の

枯林の闇に迷ふ時

離人涙の一年

「知らず宇宙の幸や何。」

三十五弦全盛の

榮華の花を玉盃に

浮けて奏でしそのむかし

誰が西海の波高く

没落の夢結びにし。

遂に散るべき紅葉の

運命さだめなこがらしせば木枯風に

誘ひし罪のなごかある

夢より淡き優人の

胸のひゞきに秋ふけて

今落葉の露れもく

やがて暮を行く空のごと

木々の梢の秋の色

暫しの榮にうつらふも

戀知らぬ身に秋草の

露の恨はなからまし

(三)

人間五尺塵の世に

戀なかりせばぬかばかり

揺落窓につたへ入る

美神の歌に酔はましを

人知れず胸悶わては

誰に捧げむ弱き歌。

戀に泣くともまきのを丈夫の

弱きを責むな秋の風

よく洛城の東に

運命の手のつらくとも

見よや野山の榮の色

時雨に濃き紅を。

とはに語らぬ幽玄の

名残の榮を仰きみば

空に消ね行く雲一朶

地は揺落の聲しづか。

小詩會詠草

○影

野の寺の古き壁畫の靈ぬけて花にさびしき影をあたへぬ 星陵

夕ぐれのそば路をたどる旅僧の影は長うて一谷越わぬ 白月

たぼる夜に虫の音かれし芝の上を走る童の影うすれゆく 露月

朝あけの霧にしづめる野の寺に落葉かく子の影まざれ入る 聖花

朝のかげ磯のこまやにまづひきて力の歌よ浪に消ねゆく 蓮北

夕ぐれの闇なる影に魂のせてつひにうせにしたさなうぐひす 夕闇